

---

# 幻想郷紅白合戦

冥界寺吹雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想郷紅白合戦

### 【Nコード】

N0484G

### 【作者名】

冥界寺吹雪

### 【あらすじ】

幻想郷を巻き込む一大企画が今始まる。背後に渦巻かない陰謀、様々な思いが交錯したりしなかったりの戦場で、少女達は戦いの為に歩みを進める。暇を見て執筆を進める超巨編！

**第一話 次第はことに緩やかに（前書き）**

序幕にあたる部分

## 第一話 次第はことに緩やかに

「・・・はあ」

桜が咲き誇り吹雪のように桜色が舞う大地。そんな場所で、少女は憂鬱モード全開で象並に重いため息を吐き出した。給料日に財布を盗まれたサラリーマンのような表情である。

「・・・はあ」

今度は海溝よりも深いため息。

「これでは地獄の財政は悪化する一方。このままでは人を裁くのはおろか、明日の私の生活が危うい・・・」

何度が重量感たっぷりのため息を繰り返すと、突然少女の表情に一筋の光が差し込む。

「・・・そうだ、いいことを思い付いた」

二筋も三筋も差し込んでいた。寧ろ怖い。

少女がパチンと指を鳴らすと、すぐに別の少女が現れた。彼女は大鎌とボートのオールで二刀流を決めている。

「何のご用でしょう？」

敬語の割に軽い口調の返答が返ってくる。その問いかけに少女はうつすらと笑みを浮かべて

「  
「！？、本気ですか！」

まるまると目を見開いて少女は一瞬、驚きの表情を隠せない。しかし、すぐに元の表情を取り戻した。

「・・・わかりました、おまかせください」

ゆるい返答を残すと、少女は颯爽と桜舞う大地を翔けていった。残された少女は企みをあらわにする悪代官の笑みを浮かべて、喉を鳴らしていた。

## 第二話 博麗神社百鬼夜行

今日の博麗神社はいつにも増して賑わっていた。巫女である博麗霊夢からしてみればこれほどうれしいことはないはずであるが、渋柿でも食べたような顔で境内の有様を眺めていた。

・・・妖怪は賽銭など持つてはこない。というか、この神社に立ち寄るものの殆どは金など持ち合わせていない。人間の里からここまで来るには距離が有り過ぎるし、それでも常連の人間は何故かお金を持ち歩かない（魔法使いとか、メイドとか）。

「霊夢、今日は随分と人が集まってるんだな。何か企画でもしてるのか？」

賽銭知らずの魔法使い、霧雨魔理沙が声をかける。

「知らないわよ。こんな様子じゃ来る客も寄り付かないし、営業妨害もいいところだわ」

「最初から来る客なんてピチューン」

桜もまだ咲かぬ二月。新年会にしては遅く、花見にしては時期尚早なこの時期に集まる理由とは一体なんなのか。参拝者モドキをざっと見渡し、そして目についたのは

「あんたかあ萃香！！」

「ふええ霊夢！？なにになになに！？」

突然霊夢に胸倉をわしづかみにされた萃香はじたばじたばた。しかし霊夢は止めるどころか更に力を込めて問いただす。

「何もないのにこんなに人が集まる訳ないでしょうが！正直に白すれば死をもつてして許してあげるわ！」

「それ・・・許してな・・・ガクッ」

力尽きた。霊夢は知ったことかと更に萃香を激しく揺さぶるが、反応がない。ただの屍のようだ。

「皆さん、今日はよくいらっしやいました！こんなに集まってくれるなんて、私は感動の一言です！」

きらびやかな装飾が施された豪華特設ステージの上で、少女は堂々と叫ぶ。全員の視線が一瞬にして集中下のは言うまでもない。

「・・・閻魔様よね、あれ」

霊夢がポカン顔で呟く。

「あら霊夢、聞いてなかったのかしら？」

不気味な低音と共に空中を浮遊する紫が右手の扇子をくるくるしながら言う。

「何でもあの閻魔がイベントを企画したらしいわよ？詳しい話は現地説明ってことになってるけど、退屈嫌いの人はほいほい現れたってところね」

「あんたもね」

「そりゃ退屈だものお」

はあ、と重く息を吐く霊夢。何となく誇らしげに胸を張る閻魔こと四季映姫の姿に忌ま忌ましい視線を送り付けてやる。

「百聞は一見にしかずです。小町、例のものを配りなさい」

あいさー、とゆるい返答をしたのはご存知サボリ死神小野塚小町。境内の人妖その他諸々に関わらず、手当たり次第何かを配っている。勿論それは霊夢も例外ではなかった。

「・・・チラシ？」

配られたのは一枚の紙切れだった。鼻をかむのにちょうどいいサイズである。

「えーつとなになに・・・。幻想郷紅白合戦開幕す、優勝チームには豪華賞品が授与されたし」

「豪華賞品っ！？」

紫が読み上げると、霊夢はあからさまに声を上擦らせて言う。やれやれ、と言った感じで魔理沙は肩をすくめた。

「でもまあ気になるっちゃ気になるな。あの閻魔様が用意するんだ、やつぱりいたいそうな品だろうな」

そんな霊夢達の会話も気にせず映姫は続ける。

「このイベントのルールは単純明快！ここにいる皆さんが紅白に別れ、お互いに設けられた勝利条件を達成すべく戦うだけ！詳細は配布したルールペーパーに記載されていますので、目を通しておくように」



要するに戦えばいいらしい。チラシはチーム分けや勝利条件、細かな設定等でびっちり埋め尽くされていた。

「この文字量でよく単純明快とか言えたなあの人」

「まー、ゲームは作りこまれていたほうが面白いじゃないの」

「この、博麗神社の賽銭箱を拝借させてもらう、って言うのが気になるぜ」

「・・・お賽銭が集まるような使い方だといいわねえ」

こうして、些細なことから戦いの火ぶたは切って落とされたのであった。

## 幕間 幻想郷紅白合戦ルールペーパー（前書き）

第二話にて配布されたチラシの内容です。

## 幕間 幻想郷紅白合戦ルールペーパー

### 幻想郷紅白合戦ルールペーパー

意義：本企画は幻想郷の活性化が第一の目的であり、決して賭け事に発展させて利益を得ようなんて魂胆はありません、本当に。

概要：参加者を紅白の組に分断し、30日間対決。どちらかが勝利条件を満たした時点で勝敗確定。勝利した組には豪華賞品が贈呈されます。なお、博麗神社からは予め賽銭箱を拝借いたします。ご了承ください。

### 組分け一覧

#### 紅組

- レミリア・スカーレット（リーダー、空）
- 紅美鈴（地）
- パチュリー・ノーレッジ（空）
- 十六夜咲夜（地）
- フランドール・スカーレット（空）
- 霧雨魔理沙（空）
- アリス・マーガトロイド（空）
- 上白沢慧音（地）
- 藤原妹紅（地）
- 古明地さとり（地）
- 火焰猫燐（地）
- 靈烏路空（空）

- 古明地こいし（地）
- 東風谷早苗（空）
- 八坂神奈子（地）
- 洩矢諏訪子（水）

#### 白組

- 西行寺幽々子（リーダー、空）
- 魂魄妖夢（地）
- プリズムリバー三姉妹（一人扱いとする、空）
- 八雲橙（地）
- 八雲藍（地）
- 八雲紫（空）
- 博麗霊夢（空）
- 鈴仙・優曇華院・イナバ（空）
- 八意永琳（地）
- 蓬莱山輝夜（地）
- 河城にとり（水）
- 射命丸文（空）
- 伊吹萃香（地）
- 星熊勇儀（地）
- 比那名居天子（地）
- 永江衣玖（空）

#### 各領土

#### 紅組

- ・紅魔館（本陣）
- ・迷いの竹林
- ・地霊殿
- ・洩矢神社

## 白組

- ・白玉楼（本陣）
- ・永遠亭
- ・妖怪の山
- ・天界

（詳細）

勝利条件：勝利条件については、二組別のものが設けられている。

## 紅組

白玉楼に設置された寶銭箱の破壊。

## 白組

制限時間終了、もしくは全領土の制圧。

WZについて：上記の組分けに記載されている空地水。これはその人物がどこを移動出来るかを示した表記である。以下、各WZについての詳細。

空：飛行移動のみ可能。ただし、自陣の領土以外への着陸は不可。  
また、連続飛行は三時間が限界とし、一度着陸した場合は三時間行動不能となる。

地：地上移動のみ可能。飛行はあらゆる局面で不可。敵領土占領が唯一可能で、敵を領土から全員撤退させた後に占領宣言を行い、一

時間その場に留まることで占領確定。

水：地上及び水上移動が可能。飛行はあらゆる局面で不可。地上での攻撃は一切行うことが出来ないが、地上の味方を水路輸送する際に必要。

妖精・妖怪：各組には幻想郷の妖精、妖怪を多数配属。それぞれのWZは、妖精（空）、妖怪（地）となっている。五日毎に運営より、一定量が補給される。

能力補正：人間や妖怪、あらゆる種族が入り乱れての企画故、能力均衡の為に一部人物には能力の制限をかける。下記以外の者も、良識ある行動を。

八雲紫：境界を使用しての味方輸送禁止。ただし、自分のみは可。

十六夜咲夜、蓬莱山輝夜：時間停止による移動時間短縮禁止。

上白沢慧音：歴史の改竄禁止。

アリス・マーガトロイド：人形のWZは空として扱う

レミリア・スカーレット：運命操作禁止。

霊烏路空：核兵器の使用禁止。放射性物質は抜きましょう。

以上で本企画の説明を終了します。皆さんの活躍に期待すると共に、  
幻想郷の発展に御協力お願いいたします。

スタッフ：四季映姫ヤマザナドウ、小野塚小町

広告：勝利組の予想大会を行います。今回参加出来なかった！なんて方は奮ってご応募下さい。実施は、企画本部の博麗神社となっております。

### 第三話 打ち上げ五秒前

対戦初日、いつもからは想像もつかないような緊迫感が幻想郷中を支配していた。快晴、戦闘にはうってつけの気候である。

「これはまたうじゃうじゃいるのね。どこからかき集めたのかしら？」

白玉楼。何百もの妖怪や妖精が隊列を為す光景を目の当たりにした霊夢はそんなことをぼやく。

「閻魔様、結構本気みたいね。面白そうで何よりじゃないの。あー、豪華賞品って何かしら？」

口元でじゅるじゅるいわせながら浮遊する幽々子。

「・・・それにしても、何で私の賽銭箱が必要なのかしらね。破壊対象ならなんだっていいのに」

縁側の正面に堂々と構える賽銭箱に体重を任せ、ため息を混ぜながら愚痴る。いつの間にか賽銭箱が移動されてて映姫を怒鳴り付けていたのはついさっきの話。

「いいじゃないの。どうせ壊れはしないんだから」

日傘をくるくるさせながらせつせと地面を撫でるように触っている紫は、怒りをあらわにする霊夢を軽くなだめる。

「・・・まあ、そうね」



「私達三人が守っているんだもの。破壊は愚か、侵入も許さないわ」  
口元をつりあげ、紫は気味悪く笑ってみせた。

「・・・はい。これで仕掛けの準備は完了。あとは各地で頑張ってる味方次第・・・」

「ご苦労様」。こっちはこれさえ破壊されなければいいのよね。楽勝楽勝」

白玉楼への敵侵入は敗北へ繋がる唯一の道。この道さえ閉ざしてしまえば後は一方的に勝利するのみである。幽々子と紫の意見は合致し、ありったけの侵入対策と反撃の準備を仕掛けたのだった。準備はまさしく万端。しかし、紫は決して奢ろうとはせず、寧ろ苦い表情に変わりつつあった。

「問題は各陣地の争奪戦ね。どんなに巧妙な作戦を立てても、自らの策に溺れかねないのが今の現状よ。基本的には向こうの出方を見て、それを一つひとつ潰していく形になるわね」

霊夢はいまいち飲み込めていない様子で、次の説明を待つように紫に視線を送る。対して幽々子はどうでもいいようで、はたまた全て把握しているのか、お餅を頬張りながら満面の笑みを浮かべていた。

「地霊殿の主。彼女の前ではどんな奇策もおままごと同然。・・・彼女が地底の守りに徹しているのなら問題はないのだけれど」

なるほど、霊夢は納得の吐息を漏らすと同時に表情を歪める。心を読まれる、即ちどんな作戦で挑んだとしても手の内が丸裸にされてしまう。そうなのはこちらから攻めるにあたって、正面から正々

堂々とぶつかる他に手段は残されていないのだ。対して敵はあらゆる作戦を練ってこちらの領土を奪いにくるだろう。下手をすれば全ての領土さえ奪われかねない。

「彼女のいない場所を見計らって策を発動するしかないわね・・・。折角面白い作戦たくさん考えたのにい」

ふざけた口調で紫は言う。まあしかし、声色から察すると悔しいのは事実のようだ。

「いいんじゃないの？要は勝てばいいんだし」

「どうせ勝つなら、徹底的に叩き潰したい」

「んー、桜餅おいしー」

白玉楼の準備は、どこまでも万全だった。

地上、紅魔館。本陣であるはずのこの地に、しかし妖精や妖怪の姿は殆ど見られない。エントランスロビーでなにやら打ち合わせをする咲夜と美鈴は、背後からかけられた鋭い声に一瞬肩を震わした。

「お嬢様、どうなさいました？」

紅魔館の主にして最高権力者、レミリアスカーレットは腕組みをしながら咲夜に笑いかけた。

「何をしているの？あなた達も早く行きなさい」

「・・・しかし、私達まで本陣を抜けてしまつては万が一ここに攻められたときに」

「その万が一を無くす為に、貴女達が行くんじゃない。それに」

不敵な笑みで、レミリアは自信あり気に

「ここなら私とパチエで十分よ。鼠一匹だつて、侵入は許さない」

昨日からレミリアは館中を駆け回っていたが、その時何か仕掛けを施したのだろう。

朝起きてみたら館の殆どの場所が、味方に対して立入禁止になっていたのだから驚きである。パチュリーはというと昨日は図書館に籠りつきりで、食事の時間にも姿を現すことはなかった。咲夜は今の今まで不思議に首を傾げていたが、なるほどこの為か。自分でも無意識に一度小さく頷くと、咲夜は美鈴に耳打ち。

「・・・。それでは、行つて参ります。ご安心下さい、そう簡単には敵は近づけませんから」

短く言葉を切ると、二人は颯爽と館を飛び出した。そうしてロビーに残ったのはレミリア、ただ一人である。

「くくく。どう潰してやるつか・・・」

不気味な笑いはひっそりとした館にいつまでも反響を続けていた。

博麗神社、事の元凶は周囲の雰囲気にもれることなくどこまでもマイペースだった。裁判をつとめる者として回りに流されない性格は重要ではあるが、

「さーさー賭けるなら今しかないよー今しか！毎度毎度ー！」

・・・あえてノーコメントにしておこう。

「そろそろ開始予定時刻ですよー。打ち上げ準備開始ー」

小町が導火線を弄り始める。その様子に映姫は一瞬視線を流すが、次から次に流れてくるお客の対応に追われてしまいおまかせモード。

「点火秒読みー。ごー、よーん、さーん」

気の抜ける声。こんなのが、これから始まる大戦の開幕だと言っただから呆れたものである。

「にー、いーち・・・」

そして、気怠い雰囲気と共に

「・・・開始ー」

開戦を告げる花火が打ち上げられた。

#### 第四話 クルセイダー作戦（前書き）

忙殺状態から解放されて、漸く更新です。

## 第四話 クルセイダー作戦

幾重にも竹が生い茂り、日光を殆ど通さない迷いの竹林は鬱蒼としていた。開幕の打ち上げから一時間、かなりの距離を歩き続け早くも足が悲鳴をあげている慧音はしかしそんなそぶりも見せずにひたすら奥地を目指していた。

「大丈夫か慧音？辛いんだったら少しは休憩もはさめるぞ」

隣で慧音を支えるような仕草をみせるのは妹紅。とかく彼女もピンピンに元気というわけではなく、普段飛行に頼っていて歩かない分余計に辛く感じているようで、姿勢を前へ屈めていた。

「・・・他の奴らも参ってるみたいだしな、休憩にしよう。各員、周囲警戒を怠らないように」

彼女達の後方に続いていた妖怪達がやれやれといった具合に腰を下ろす。その数ざつと百名といったところで、何とも壮観である。昼間版百鬼夜行といったところだろう、そんな異様にもとれる光景がそこには広がっていた。

迷いの竹林は、永遠亭へと繋がっている。というか、迷いの竹林の中に永遠亭があるので、この戦いで真っ先に戦火が起こるのはこの場所だと紅組の者達は踏んだのである。また、陣地が隣合っているせいで一度どちらかの陣地が落ちれば再び取り返すのは非常に困難だったりもする。故に、真っ先に衝突するのはまず避けられないであろう。

そして今奇しくも、宿命的に戦闘は始まりを告げた。

「・・・輝夜！」

思わず妹紅が声をあらげた。炎に揺らめく瞳に映るのは、黒い長髪の美しい少女の姿。

「妹紅、やっぱりあなたなのね。それもこれまた大軍勢で」

そう言う輝夜の後方にも、同じく百名程の妖怪達が戦闘はまだかとひしめいている。その中には輝夜の他にも見慣れた顔がいた。

「永琳、それに鈴仙か」

呟き、唇を噛み締める慧音。予想出来なかった訳ではないが、実際に目の前に戦力差を突き付けられるとそうせざるをえなかった。

一方妹紅はというと、悪巧みを企てる悪党のように不敵な笑みを浮かべていた。秘策あり、とでも言いたげに。

「余裕だな、妹紅」

「ああ、こいつらの攻撃を『耐える』くらい、余裕だろ？」

「・・・まあ、そうだな」

首を傾げてしまった慧音の肩をとんと叩く妹紅。慧音は作戦の概要を把握していないようだが、妹紅が言うなら心配ない、と視線を敵に向けるのであった。

「全軍、戦闘開始！弾幕放て！」



誰ともわからず叫びが上がり、それに呼応した妖怪達はたちまち奮起。弾幕による総攻撃が開始された。

主砲に近いレーザー攻撃を主軸に弾幕を拡散させるが、レーザーは的が小さい為殆ど当たることなく、弾幕は例え当たったとしてもたいしたダメージが与えられない。

「姫に刃向かうものは容赦しませんよ？」

その戦場でひたすら成績を伸ばしているのは飛行タイプの永琳だった。地上からの攻撃は厚い竹林によって殆ど受け付けることなく次々と地上の妖怪に対して大弾を撃ち込んでいく。紅組の被害はたまったものではなく、既に戦闘不能に陥った妖怪も数名出ている。一方的な蹂躪に開戦前まで余裕な表示を浮かべていた妹紅も流石に苛立ちを隠しきれない様子で、

「空に構うな！攻撃の回避に専念し、隙があれば反撃しろ！」

思わず声に力が入ってしまう。無論妹紅や慧音も攻撃をかけるが輝夜や優曇華の攻撃の対応に手一杯で空の永琳には対応出来ない。一方の輝夜達とその配下の妖怪は横に広がりながら妹紅達を囲むように左右端が前進。

「全員、包囲網を展開。この竹林奪取の為に速やかに！」

輝夜が妖怪達に的確な指示をだすとそれに答えるように妖怪達の包囲は迅速に行われる。前方に加え側面からの攻撃も加わりいよいよ妹紅達の戦力は削がれてきた。

「外線作戦か・・・怯むな！全弾幕を前方一点に集中しろ！」

前方一点目掛けて妹紅達の配下妖怪全てが一斉砲火を繰り出した。レーザーと弾幕が完全に一体化したそれは城壁だろうが大山だろうが貫くであろう、大地をえぐりながら包囲をしていた妖怪の一点に向かって突き進む。

「全軍猛進！包囲網を突破す・・・！？」

威勢のついた声が突如として消沈し、代わりに出たのは驚愕の悲鳴にも似た声。跡形もなく消し飛ばしたはずの妖怪達が未だ平然と立っていたのだから、無理もない。その上先の攻撃で疎かになった側面攻撃に成す術なく戦力を削がれていく。慌てて突破を中止するが既に時遅しと言ったところか、戦力差はもはや取り返しの着かないところまで開いてしまった。

「・・・鈴仙の錯覚か。姑息な手を」

と言いかけ、口を紡ぐ妹紅。戦闘に姑息も卑怯もない、それもこれも全て作戦に対処出来ないこちらが甘いのである。

「戦いは力だけではないわよ、妹紅」

挑発腰に牽制する輝夜だが、妹紅は至って冷静だった。不利は否めない、しかし、だからこそ焦ることは許されない。それに、勝算がない訳ではないのだ。

「姫様、あとはお任せしましたよ」

依然空爆が続いていた永琳が突然身を翻し、そんな言葉を置いて竹

林の彼方へと消えていった。戦闘開始から三時間。すでに戦力の差は圧倒的で、もはや覆るものではなくなっていた。なおも戦力差を広げているこの状況での永琳撤退は、永遠亭の面々にとって対したことではない。・・・ない筈であった。

「推して参る、だぜ！」

声が聞こえた時には時すでに遅し。上空からの完全な不意打ちに対処しきれなかった永遠亭の軍の中心に着弾したスパークは、混乱を誘発するには十分すぎるものだった。数秒前まで妹紅達の軍を包囲していた陣形は完全に崩壊。これを好機と慧音は自軍を率いて一時後退、外線作戦の打破に成功する。

「おーおーこりやいい具合に制圧されかけだなあ。だが、私がきたからにはもう安心だ」

「魔理沙、いいタイミングだな。助かる！」

「援軍！？直ちに陣形を立て直しなさい！」

「おっと、邪魔はさせないぜ？」

撤退させまいと攻撃体制に移る輝夜を、更にさせまいと遙か上空からスパークをぶつ放す魔理沙。

「きゃあー!!」

「姫様！」

ほぼ真上からの光線を耐えようと試みるものの失敗した輝夜の身体が吹き飛ばされる。永琳のおかげで熟知していたが、上空と地上では圧倒的な地上不利という事実をあらためて痛感する。

「よくも姫様を・・・落ちろっ！」

優曇華を筆頭に永遠亭の妖怪達が上空に向けて一斉射撃を開始。輝夜の非力な叫びは、弾幕の発射音でいとも簡単に掻き消されてしまった。

「幻想郷最速の私に弾幕か。その程度じゃ 그레이ズも溜まらないぜ！」

同時に上がる妖怪達の悲痛な叫びも、ごく一部の妖怪にしか聞こえていなかった。優曇華が事態に気付いたのは、弾幕も止んで場が落ち着きだした頃。

「・・・っ!？」

耳をビクンと立ち上げる。気付けば妖怪の全員が対空砲火を行い、地上の敵妖怪を完全に野放しにしまっていたのである。無論、その間にも妹紅、慧音を含む地上攻撃にさらされ続け、漸く対処出来たかと思えば既に何名もの妖怪が敗走、撃墜されていた。

「空は囷だったの・・・まんまとはめられたわね」

「はめた？何を言ってるんだ？お前らが勝手に私を攻撃してきたんだろ」

再攻撃を促す挑発ともとれる言動に優曇華が目を血走らせて唇を噛み締めるが、その目の前に輝夜が割って入る。

「落ち着きなさい。まだ戦力ではこちらの方が圧倒的に上手、焦りは敗北を招くわ」

「・・・了解です、姫様」

しかし、と優曇華は続ける。

「このままあいつを暴れさせてしまつてはこちらの軍の被害は決して目をつむれるものではないでしょう。師匠が不在の今、地上部隊だけでの対抗はあまり得策ではないかと・・・」

その事實は輝夜も痛いほど把握していた。例えこの戦いで勝利をおさめたとしても、軍の被害は甚大なものとなるだろう。輝夜は何重にも唸りの声を重ね、苦渋の決断を下すこととなった。

「・・・全軍、撤退よ！負傷者を優先し、速やかに撤退しなさい！」

無駄に兵を失うよりは、魔理沙の飛行可能時間が切れるまで拠点に立て籠もるのが得策と輝夜は踏んだのだ。永琳が再び出撃可能になるか、本拠地に応援を要請してから攻めに転じるのでも決して遅くはない。

「な、なんだこいつら！」

妖怪の誰かが叫んだ。それは進行方向最前列、奇妙な光景が輝夜配下の妖怪の撤退の足を止める。

「何事？」

「報告！剣のようなものを構えた人形が多数、配備されています！宙に浮く奇妙なもので・・・」

「人形・・・し、退きなさい、今すぐ！」

やられた。輝夜は舌打ちし、しかしこの状況下に退路がないことを

悟っていた。

「ドールクルセイダー!!!」

上空のアリス・マーガトロイドは自らの登場を高らかに宣言するかのごとく叫んだ。魔理沙だけでもやつかいな空の敵に加え、もう一人の魔法使いの導入。戦力差も互角に近づいているこの状況での新手法、輝夜達にとって敗北はもはや免れるものではなかった。

「敵人形部隊の攻撃に我が軍の退路遮断!ご指示を!」

「・・・仕方ないわ」

苦しい一言、そして決断する。

「永遠亭を・・・放棄するわ!これより本部への撤退作戦に変更、人形部隊を一点砲火の後緊急離脱します」

勝ち目のない戦いを続けることに得はない。しかし、今度は輝夜達が包囲網にさらされてしまい、撤退すら容易なことではなかった。退路を阻む人形、追撃を始める妹紅達の部隊に唇を噛み締める輝夜。戦力は目に見えて削がれていくが、もはや振り返る余裕はない。前方への一斉砲火で強引に退路を広げ、撤退せざるを得ない。

「・・・覚えてなさい。これは撤退ではなく転進。必ずこの地を奪い返しに戻ってくるわ!」

撤退戦は輝夜達の猛反撃の末、大部分の戦力を温存することに成功した。思った程の成果を上げられなかった追撃に妹紅はうなるが、慧音は満足気な表情をあらわにして

「よくやったじゃないか妹紅！敵の領地は奪えたんだ。もつと喜んでいいんじゃないか？」

そんな言葉を受けてしまい苦笑いの妹紅。確かに、自分達は戦いに勝利し、敵地を治めたのである。何を悔いる必要があるのか。

「そうだぜ妹紅？ま、これで少しは紅組の奴らに私の实力を示せただろうな。はっはっは」

「まあ、私が考案した作戦だもの。成功して当然よね」

「アリス・・・は、何かしてたっけか？」

「あれだけの人形を一度に扱うのは大変なのよ！！」

戦闘があつたとは思えない穏やかなムードは、勝利で勝ち得た至福の時とも言える。

「だが、あまり油断するなよ。またいつあいつらが攻めてくるやもしれんからな」

「そうだな妹紅。まずは次の戦闘に備えて、先の戦闘で欠けた妖怪を補充しなければ・・・。魔理沙の飛行可能時間もそろそろ尽きる頃だ、戻るついでにレミリアに要請しておいてくれないか？」

「了解だぜ。んじゃアリス、ひとつ飛びといこうか！」

「今日は私のスピードに合わせて飛・・・って速い！速いからあああああ！！」

秒かからずに星になった魔理沙達に微笑を浮かべつつ、沈んでいく夕日に背を向けて二人立ち尽くす。戦闘で荒廃した大地を恨めしげに眺め、妹紅は深くため息をついた。

「・・・苦しい戦闘だったな。私なんか、特に戦火も上げていない」

そんなことはない。一言フォローすることはたやすいことだが、慧音はそれをしなかった。

「こちらもかなりの戦力を割いた。自ずと他地域にも影響はでくるだろう。せめて、もう少し追撃が」

「そういうところ、妹紅の悪い癖だな」

話に割り込まれて面を食らってしまう妹紅。

「言ったはずだぞ？この勝利は大きな一勝だ。それを自分は役に立てなかったとか、もう少し追撃がとか、そういったネガティブな言動は他の妖怪の士気にも関わるんだ。それに・・・」

はあ、と小さく息をついてから

「私は今回の戦闘、妹紅は大活躍だったと思ってるしな」

慧音はまっすぐと妹紅の紅く照る瞳を見つめ、にっと笑顔になる。それがなんだか、妹紅には妙に照れ臭かったのだろう。こくりと俯いて、慧音を仰ぎ見ることさえしようと思わず

「そうだな、よく頑張ったんだな、慧音も皆も、そして私も・・・」

夕日は、地平線の彼方へと沈んでしまった。



#### 第四話 クルセイダー作戦（後書き）

まだまだこれからの感じ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0484g/>

---

幻想郷紅白合戦

2010年10月9日20時35分発行